

学校における靴制度と児童生徒の学校生活 —京都市立小・中学校の事例から—

榊原 禎宏・中尾 茜*

The Shoe System in Schools and Its Impact on Students' School Life: A Case Study of Kyoto Municipal Elementary and Secondary Schools

Yoshihiro SAKAKIBARA and Akane NAKAO*

Accepted July 11, 2023

抄録：学校には、明確に存在し児童生徒に影響を及ぼすと考えられるにもかかわらず、根拠や意義が不明確な制度が存在する。本報告では、その一つとして小・中学校での靴制度を取り上げ、その実際と卒業生の回想から学校生活にとって「見えにくい」制度が持つ意味を考察した。具体的には、京都市立小・中学校 214 校を調査し、同じ市立学校にもかかわらず靴制度は一律ではなく各校の裁量に属すること、小中合同でのコミュニティスクールの一方、靴制度に齟齬の見られる場合が少なくないこと、生徒にとって一足制と二足制のメリットとデメリットがそれぞれあることを明らかにした。

索引語：靴制度、学校経営、学校生活、京都市

Abstract: This research delves into the often enigmatic shoe system prevalent in elementary and junior high schools, seeking to shed light on its significance and rationale. By examining its practical implementation and gathering insights from graduates, this paper investigates the facts and implications of the shoe system for students' school experiences. The study involved a survey of 214 schools in Kyoto City that revealed a lack of uniformity in the shoe system, which is left to the discretion of each school. Interestingly, even joint elementary and junior high community schools exhibit variations in their approaches. Through this comprehensive analysis, the advantages and disadvantages of the shoe system begin to surface, offering valuable insights for the educational community.

Key Words: Shoe System, School Management, School Life, Kyoto City

* 城陽市立東城陽中学校常勤講師

1. 問題の所在－「見えにくい」教育制度への注目

学校は公教育の代表的存在として、その設置、管理運営の基準や手順が厳密かつ公的に定められ、制度として成立している。また、とりわけ 21 世紀に入ってから、公的機関の説明責任や情報公開の必要性が叫ばれる中、その客観化、透明化が目指されてきた。このことは、学校での諸業務の根拠や基準を求めることにもつながっている。それは、教職員、教育課程、教育財政のありように留まらず、学校の時間的、空間的条件に及んでおり、昨今の教員の「働き方改革」や新型コロナウイルス感染下での教室経営のスタンダード化は、その具体例だろう。

この一方、学校に関わる制度は、明確な理由や根拠を示すことができるものばかりではない。そこには、ルールとルーチンを伴う仕掛けとして機能しているにもかかわらず、日々の学校生活に馴染んでいるがゆえに当たり前に思われがちで、人為的な所産であることに気づきにくい、「見えにくい」教育制度が存在する。これは、学級に代表されるミクロレベルの経営の場に、より多く見出せるだろう。たとえば、「教諭は児童の教育をつかさどる」（学校教育法 第 37 条）にもとづく各教員の職務上の裁量を背景にした、教室での児童・生徒の座席の配置と定期的な「席替え」、教員と児童・生徒間の呼称や挙手といったコミュニケーション、「みんな遊び」等を含む係活動や班活動を挙げることができる¹⁾。

これらは、明らかに存在する制度にもかかわらず、その成立の根拠や手続きが明文化されていないことが多く、可視化が困難である。このため、分析対象にしづらく議論の俎上に載せることも容易ではない。その結果、制度の改変につなげられず、「何となく」ではあっても維持されることになる。制度らしくないことが却って制度としての命脈を保つことになるのだ。

こうした性格を帯びた「見えにくい」制度は、学級経営に限らず学校経営の領域においても見出せるのではないだろうか。そこで本報告は、人為的な仕掛けにもかかわらず、あたかも「第二の自然」かのように現れているのではないかと仮説できる事項として、学校における靴制度に注目し、その実際と児童生徒の学校生活に及ぼす影響について知見を得ようとするものである。

2. 先行研究の状況と課題

はじめに、靴制度に関する先行研究の状況を確認しておこう。まず、神崎・砂本（2019）²⁾らは、小学校での靴制度に関する全国調査を行っており、その結果、「二足制採用を問う設問の有効回答 743 校中、99.7% にあたる 740 校が二足制を採用していると回答し、墨田区の 2 校と港区の 1 校の 3 校が土足のままの一足制（土足制）だった」³⁾と、小学校においては二足制がほぼすべてであると述べている。また、「二足制を採用する理由として、『屋内と屋外の区別』『衛生上の理由』『校舎内への土砂侵入防止』『床の保護』などがあつた」、「二足制を採用していない墨田区の 1 校からは、『下足入れの場所がないため』」⁴⁾と、二足制または一足制を採用する理由にも言及している。

また、吉田・河村（2009）は、二足制について歴史的観点から説明を試みている。江戸時代は和式建築だったことから、「建物に入るときは、教師も生徒も玄関で履物を脱いで教場へ入っていたと考えるのが自然である」⁵⁾。また、明治期の「小学校設備準則」第 5 条には、『校舎ハ

生徒ノ帽、傘、雨衣、足駄等ヲ置クベキ場所ヲ備ウルヲ要ス。』と明記されており、生徒の足駄を置く場所つまり、現在の昇降口となるような場所が必要であると示されている」⁶⁾。つまり、建築物の条件から靴の履き替えを余儀なくされてきたという解釈である。なお、吉田らは昇降口について、『建築学用語辞典 第二版 (1993 年)』から「学校の児童、生徒が校舎に出入りし、靴と上履を履き替える場所」を、また、『建築大辞典 第二版 (1993 年)』から「大きな建物などで戸外から建物へ出入りする大きな出入り口。一般的には学校の生徒が出入りし、靴を履き替える場所」を引いて⁷⁾ その意味を確認している。

さらに、佐藤 (1987) は昇降口について、「下ばきで校舎に上がらせないという日本独特の慣行から生じた、日本の学校独自の空間なのである」⁸⁾ として、「学校だけがいつまでも旧来の慣行を守り続けてよいのだろうか」⁹⁾ と問題提起している。同様に佐藤 (2000) は、「日本独特の慣行」について、社会生活方式の近代化の進展に伴い、二足制から一足制に変更した公共施設がある一方、学校では旧来の慣行として二足制を採用し続けていると、次のように述べる。

和式慣行が社会的に浸透しきっていた 1920 年代ごろまでは、官庁はもとより劇場や映画館、百貨店までも多くの公共施設において、二足制を当然としていたのだが、社会生活方式の近代化の進展に伴い、施設への出入りに抵抗感を与えないために、一足制に切り替えた。今や日本趣味を特徴とする料亭や日本料理店を別にすれば、小・中学校を中心とした学校に限られているといっても過言ではない¹⁰⁾。

このような研究状況であるが、残されている課題もある。その一つは、一足制を採用している学校に関する調査が行われていない点である。先述の神崎・砂本の研究は、全国的調査ではあるものの小学校に限られ、かつ地域的な偏りが著しくサンプリングの問題が大きい。はたして、一足制の学校はないものと見なしてよいのだろうか。

もう一つは、子どもたちの学校生活にとって靴制度がどのような意味をもつかに関する研究がまったく見られないことである。制度がどのようなものとして存在するかを明らかにすることは、制度研究の第一歩だが、その影響を明らかにできなければ、制度の評価につながらず、ひいてはそれに注目する意味も持ち得ない。制度がもたらす現実への注目が必要である。

3. 京都市立小・中学校における靴制度

(1) 調査の対象と方法

以上の把握にもとづき、本報告では、2022 年度現在の京都市立小学校の全 150 校、京都市立中学校の全 64 校を対象に、各校の靴制度を調査した。まず、各学校の HP ほか関係資料から、児童生徒が上靴あるいは土足を履いているかどうかを視認、また、「上靴」「一足 (制)」「二足 (制)」「昇降口」等の表現が見られるかを確認した。その結果は、次のとおりである。

表 1 京都市立中学校における靴制度の状況

行政区	校名	足制	行政区	校名	足制	行政区	校名	足制
北	加茂川	2 足	山科	山科	1 足	西京	桂	2 足
	西賀茂	2 足		勸修	1 足		松尾	2 足
	旭丘	1 足		大宅	2 足		桂川	1 足
	衣笠	1 足		安祥寺	1 足		榎原	1 足
上京	烏丸	2 足		音羽	2 足		大枝	1 足
	上京	2 足		花山	2 足		洛西	1 足
	嘉楽	2 足	下京	下京	2 足		西陵	1 足
	二条	1 足		七条	2 足		大原野	1 足
左京	岡崎	1 足		洛友	2 足	伏見	深草	1 足
	高野	1 足	南	八条	1 足		藤森	2 足
	下鴨	1 足		九条	1 足		桃山	1 足
	近衛	1 足		洛南	1 足		伏見	1 足
	修学院	1 足		久世	2 足		神川	1 足
	洛北	1 足	右京	蜂ヶ岡	1 足		醍醐	2 足
中京	北野	1 足		太秦	2 足		春日丘	2 足
	朱雀	1 足		嵯峨	1 足		小栗栖	1 足
	京都御池	2 足		四条	2 足		栗陵	1 足
	中京	1 足		西京極	1 足		桃陵	1 足
	松原	1 足		梅津	1 足		向島東	1 足
	西ノ京	2 足		西院	1 足		洛水	1 足
	西京附属	2 足		双ヶ丘	1 足		大淀	1 足
	洛風	2 足						

(2) 調査の結果

まず、小学校については 150 校すべてが二足制を採用していることが判明した。ただし、南区久世西小学校は、2009 年度中に一足制から二足制に移行¹¹⁾しており、学校設立の当初から二足制だったわけではない。また、中学校については表 1 に示すように、64 校のうち 41 校が一足制、23 校が二足制を採用していることが明らかとなった。

この結果から、各学校は京都市教育委員会が設置、管理する施設でありながら、靴制度は必ずしも統一されておらず、各校の裁量に委ねられている、つまり、一足制か二足制かは学校経営の領域とされていることがわかる。

さらに、それぞれの中学校と小学校の通学区域を対照させたのが表 2 である。なお、京都市では、居住地の住所地（町及び地番）による通学区域にもとづき就学すべき小・中学校を指定¹²⁾しているために、ある小学校の卒業生全員が同じ中学校に進学するには必ずしも接続しておらず、いわゆる分散進学になる場合がある。

また、京都市教育委員会「京都市学校運営協議会設置校一覧（2022 年 8 月 1 日現在）」に拠り、小中合同での学校運営協議会（コミュニティスクール）が設置されている中学校区に◎印を記

した。なお、中京区西京高等学校附属中学校、中京区洛風中学校、南区洛友中学校の3校は、小学校区の指定がない。

表2 京都市立小・中学校における一足制・二足制採用校一覧（中学校区別）

北区・上京区			
中学校		小学校	
◎加茂川	2足	元町	2足
		上賀茂	2足
		紫竹	2足
		紫明	2足
◎西賀茂	2足	柊野	2足
		大宮	2足
◎旭丘	1足	待鳳	2足
		鳳徳	2足
		鷹峯	2足
◎衣笠	1足	柏野	2足
		衣笠	2足
		金閣	2足
		翔鸞	2足
◎烏丸	2足	室町	2足
		西陣中央	2足
◎上京	2足	京極	2足
		新町	2足
		西陣中央	2足
◎嘉楽	2足	紫野	2足
		乾隆	2足
◎二条	1足	正親	2足
		二条城北	2足

中京区			
中学校		小学校	
◎北野	1足	大將軍	2足
		仁和	2足
		朱雀第八	2足
◎朱雀	1足	朱雀第一	2足
		朱雀第四	2足
		朱雀第六	2足
		朱雀第七	2足
◎京都御池	2足	御所東	2足
		御所南	2足
		高倉	2足
◎中京	1足	洛中	2足
		朱雀第一	2足
◎松原	1足	朱雀第三	2足
		光徳	2足
◎西ノ京	2足	朱雀第二	2足
		朱雀第四	2足
		朱雀第六	2足
		朱雀第八	2足
西京附属	2足	—	—
洛風	2足	—	—

左京区			
中学校		小学校	
岡崎	1足	錦林	2足
		第三錦林	2足
◎高野	1足	養正	2足
		養徳	2足
下鴨	1足	下鴨	2足
		葵	2足
		松ヶ崎	2足
近衛	1足	錦林	2足
		第四錦林	2足
		北白川	2足
修学院	1足	修学院	2足
		修学院第二	2足
		上高野	2足
		八瀬	2足
洛北	1足	明德	2足
		岩倉南	2足
		岩倉北	2足
		市原野	2足
		鞍馬	2足

下京区・南区			
中学校		小学校	
◎下京	2足	洛央	2足
		下京涉成	2足
		梅小路	2足
		下京雅	2足
◎七条	2足	七条	2足
		七条第三	2足
		西大路	2足
洛友	2足	—	—
◎八条	1足	南大内	2足
		唐橋	2足
◎九条	1足	九条弘道	2足
		九条塔南	2足
◎洛南	1足	吉祥院	2足
		祥栄	2足
		上鳥羽	2足
		祥豊	2足
◎久世	2足	大藪	2足
		久世西	2足

山科区			
中学校		小学校	
山科	1足	山階南	2足
		百々	2足
勸修	1足	勸修	2足
		小野	2足
大宅	2足	大宅	2足
		安祥寺	1足
◎音羽	2足	山階	2足
		西野	2足
		安朱	2足
		音羽	2足
		音羽川	2足
		大塚	2足
◎花山	2足	鏡山	2足
		陵ヶ岡	2足

右京区			
中学校		小学校	
蜂ヶ岡	1足	常盤野	2足
		嵯峨野	2足
◎太秦	2足	太秦	2足
		南太秦	2足
◎嵯峨	1足	嵯峨	2足
		嵐山	2足
		広沢	2足
◎四条	2足	安井	2足
		山ノ内	2足
西京極	1足	西京極	2足
		西京極西	2足
		葛野	2足
◎梅津	1足	梅津	2足
		梅津北	2足
◎西院	1足	西院	2足
◎双ヶ丘	1足	御室	2足
		宇多野	2足
		花園	2足
		高雄	2足

西京区				伏見区							
中学校		小学校		中学校		小学校		中学校		小学校	
桂	2足	桂	2足	◎深草	1足	深草	2足	醍醐	2足	醍醐	2足
		桂徳	2足			稲荷	2足			北醍醐	2足
		桂川	2足							春日野	2足
◎松尾	2足	松尾	2足	藤森	2足	藤ノ森	2足	春日丘	2足	春日野	2足
		嵐山東	2足			藤城	2足			日野	2足
桂川	1足	川岡	2足			砂川	2足	小栗栖	1足	小栗栖宮山	2足
		川岡東	2足			竹田	2足			石田	2足
		桂東	2足	◎桃山	1足	桃山	2足	◎栗陵	1足	池田	2足
◎樫原	1足	樫原	2足			桃山東	2足			池田東	2足
		松陽	2足			桃山南	2足			醍醐西	2足
大枝	1足	大枝	2足	◎伏見	1足	伏見板橋	2足	◎桃陵	1足	伏見南浜	2足
		桂坂	2足			伏見住吉	2足			向島	2足
◎洛西	1足	新林	2足			下鳥羽	2足	向島東	1足	向島藤の木	2足
		境谷	2足	神川	1足	神川	2足	洛水	1足	横大路	2足
◎西陵	1足	竹の里	2足			久我の杜	2足			納所	2足
◎大原野	1足	上里	2足			羽束師	2足	◎大淀	1足	明親	2足
		大原野	2足							美豆	2足

以上のように、同じく市立中学校でありながら一足制か二足制かは決して一様でなく、校長会等で協議して足並みを揃えるのではないかと考えられる同じ行政区内の中学校であっても、ばらつきの見られることがわかる。

ちなみに、小中合同での学校運営協議会を設置しているのは、中学校については40校あるが、うち小学校と同じく、中学校も二足制を採用しているのは15校だった。つまり残る25校、当該の学区地域の約6割は、小・中学校9年間を通じた教育保障を謳う一方で、靴制度については一貫していないのである。

4. 元児童・生徒にとっての靴制度

(1) 調査の対象と方法

では、上述の靴制度のもとで学校生活を送った児童や生徒は、どのような経験や記憶をもっているのだろうか。以下では、現在の児童生徒ではなく、京都市立小学校または中学校を卒業した者を対象に、対象者の学校生活の回想として得られた記述をデータとして用いる。

具体的には、筆者の知人に協力を依頼し、機縁法で対象者を広げて、表3に示す質問項目をGoogle formsのリンクを通じて2022年11月13日（日）から12月7日（水）の期間に配布、匿名にて136名の回答を得ることができた。このうち、対象者ではなかった回答14名および非有効回答1名の計15名を除外して、121名の回答を有効と見なした。なお、現在は閉校となった小学校を卒業したケースの2名を含んでいる。

表 3 質問項目内容及び回答方法

	質問項目	回答方法
小学校について		
1	卒業した小学校	記述式 (例：〇〇区〇〇小学校)
2	卒業年	記述式 (例：200〇年3月)
3	一足制でしたか。二足制か二足制でしたか。 ※この質問において、一足制は「教室や廊下を土足のままで生活する(体育館などの特別教室での履き替えに関わらず)」、二足制は「教室や廊下を上靴で生活をする」とします。	〔一足制・二足制〕から選択
4	昇降口あるいは靴箱はありましたか。 ※昇降口は「校舎などの出入り口で靴を履き替えるところ」とします。	〔昇降口・その他(記述)〕から選択。 ※靴箱の場合、〔その他〕を選択し、〔靴箱：〇〇(設置場所)〕の記述で回答
5	履き替えの必要のあった教室はありましたか。	〔家庭科室・被服室・音楽室・技術室・コンピュータ室・美術室・体育館・その他(記述)〕から該当するものを選択(複数可)。
6	月曜日の4時間目終了時をイメージして下さい。その時のホームルーム教室がきれいだったと思いますか。	〔汚い12345きれい〕のうち、5段階評価で該当するものを選択
7	掃除はどのように行っていましたか。(例：雑巾がけ、ほうきでゴミを掃くなど。実施していた掃除方法を記入してください)	記述式
8	上靴あるいは土足に関して指導はありましたか。	〔はい・いいえ〕から選択
9	【靴指導があった場合】具体的にどのような指導があったのか記述してください。	記述式
中学校について		
10	卒業した中学校	記述式 (例：〇〇区〇〇小学校)
11	卒業年	記述式 (例：200〇年3月)
12	一足制でしたか。二足制でしたか。 ※この質問において、一足制は「教室や廊下を土足のままで生活する(体育館などの特別教室での履き替えに関わらず)」、二足制は「教室や廊下を上靴で生活をする」とします。	〔一足制・二足制〕から選択
13	昇降口あるいは靴箱はありましたか。 〔選択制：昇降口・その他(記述)〕 ※昇降口は「校舎などの出入り口で靴を履き替えるところ」とします。 ※靴箱の場合、〔その他〕を選択し、〔靴箱：〇〇(設置場所)〕の形で回答してください	〔昇降口・その他(記述)〕から選択。 ※靴箱の場合、〔その他〕を選択し、〔靴箱：〇〇(設置場所)〕の記述で回答
14	履き替えの必要のあった教室はありましたか。 〔選択制：家庭科室・被服室・音楽室・技術室・コンピュータ室・美術室・体育館・その他(記述)〕	〔家庭科室・被服室・音楽室・技術室・コンピュータ室・美術室・体育館・その他(記述)〕から該当するものを選択(複数可)。
15	月曜日の4時間目終了時をイメージして下さい。その時のホームルーム教室がきれいだったと思いますか。	〔汚い12345きれい〕のうち、5段階評価で該当するものを選択
16	掃除はどのように行っていましたか。(例：雑巾がけ、ほうきでゴミを掃くなど。実施していた掃除方法を記入してください)	記述式
17	上靴あるいは土足に関して指導はありましたか。	〔はい・いいえ〕から選択
18	【靴指導があった場合】具体的にどのような指導があったのか記述してください。	記述式
一足制・二足制について		
19	一足制でよかったことがあれば、記述してください。	記述式
20	一足制で嫌だったことがあれば、記述してください。	記述式
21	二足制でよかったことがあれば、記述してください。	記述式
22	二足制で嫌だったことがあれば、記述してください。	記述式
23	【小学校から中学校で二足制から一足制に変わった方】中学校に進学して靴制度の変化について感じたことについて記述してください。	記述式

(2) 調査の結果

はじめに、どの時期の学校経験について述べているのかを確かめるために、回答者が学校を卒業した年を示す。京都市立小学校の出身は 121 名、かれらは 2002 年 3 月から 2019 年 3 月までに小学校を卒業している。また、京都市立中学校の出身は 119 名、同じく 2005 年 3 月から 2022 年 3 月までに中学校を卒業した。卒業年の頻度別分布は、図 1 と図 2 に示す通りである。最頻値は、小学校が 2012 年、中学校が 2015 年であり、調査時点からおおむね 7～15 年前の経験にもとづく回答であることがわかる。

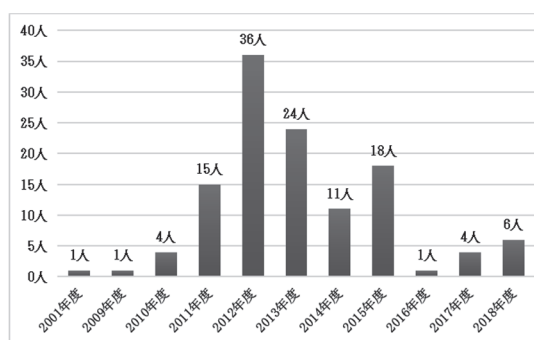


図 1 小学校の卒業年別に見た回答者数

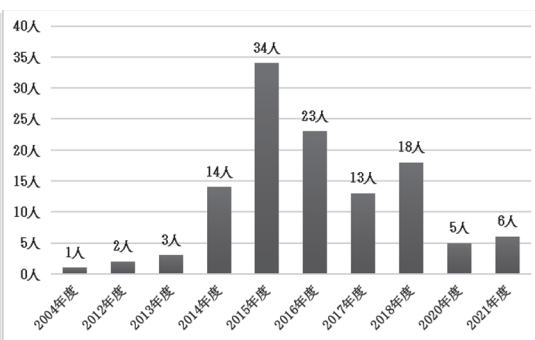


図 2 中学校の卒業年別に見た回答者数

以下では、対象者の回答から、①一足製のメリット、②一足製のデメリット、③二足製のメリット、④二足製のデメリット、⑤靴制度の違いに対する受け止め、に関する記述を取り上げる。

なお、データを整理する際に割り当てた回答者番号を、山括弧（〈〉）にて示す。また、回答に記された文言について、文意がより伝わるように若干の修正を行った場合がある。なお、一つの回答に複数の要素が見られる場合は、それぞれを数えた¹³⁾。

1) 一足製のメリット

質問項目 19「一足制でよかったことがあれば、記述してください」に対して、66 名から記述が得られた。これらを、①「履き替えのなさ」、②「教室移動の楽さ」、③「昇降口での混雑のなさ」、④「上靴の必要性・手間のなさ」、⑤「靴トラブルの回避」、⑥「靴の自由度」の内容に分類する。

まず、①「履き替えのなさ」については、56 名ともっとも多くが記されたが、それは次のようであった。「履き替える時間がないから移動がしやすい〈68〉」、「急いでいる時に、わざわざ履き替える必要が無いから、楽〈69〉」、「履き替える手間が少ないこと（登校時、グラウンドへの移動、忘れ物をして取りに戻る時、違う校舎間を移動する時、親は参観日など）〈83〉」。

また、②「教室移動の楽さ」については、「すぐに校舎に入れるところ〈90〉」、「履き替えが無く、教室移動がスムーズにできる〈93〉」などと、5 名が回答している。つづいて、③「昇降口での混雑のなさ」には、「帰るときに混雑しない〈17〉」「靴箱が混むのが嫌だったから〈42〉」「下駄箱で混まないのですぐ帰れるし来れること〈83〉」という記述が該当する。

そして、④「上靴の必要性・手間のなさ」については 4 名あり、「上靴を複数洗わなくて済むので楽であった。〈6〉」「上靴をわざわざ用意する必要が無かった〈102〉」、「上靴を管理する必要が無く楽〈133〉」というものである。

さらに、⑤「靴トラブルの回避」に関する回答は2名で、「靴の紛失等がない〈30〉」、「自分の靴を間違えたり、靴が隠されたりすることがなかった〈48〉」である。また、⑥「靴の自由度」に分類される回答は「靴が自由〈63〉」、「個性が出ること〈83〉」、「好きな靴が常に履ける〈100〉」の3名であった。なお、この他「楽」に関わる記述も6名から寄せられた。これらには具体的な記述がないため、上記の分類には含まれないが、①、②、④との親和性が高い内容と見なせるだろう。

これらの結果から、靴を分けないことによる利便性や気楽さ、靴に関わるトラブルの回避など、一足制がかねらの学校生活に好影響をもたらしていたことがわかる。

2) 一足制のデメリット

では、一足制の不都合な点については、どのような経験があるだろうか。質問項目20「一足制で嫌だったことがあれば、記述してください」には68名の回答が寄せられた。これらを、①「校内の汚さ」、②「衛生面に対する不安」、③「雨の日の土足」に分けて見てみよう。

まず、①「校内の汚さ」については65名で、「教室や廊下にほこりがたまりやすかった〈78〉」、「体育のあとは砂が教室に持ち込まれるため、掃除が大変〈68〉」、「教室の床が汚いので、上着やリュックを床に落としてしまうと汚れる〈100〉」などの声があった。

また、②「衛生面に対する不安」に該当する回答は「強いて言うなら二足制よりも衛生が気になる（泥だらけになる時があるため）〈20〉」と「トイレなどで付着した菌などが、校舎に広がる〈30〉」の2名である。そして、③「雨の日の土足」については13名あり、「靴についている泥も校舎の中に入ってくるから雨の日の廊下が汚い〈90〉」、「雨の日に濡れた靴を履いているのが不快〈35〉」、「雨の日は特に濡れていて廊下が滑りやすかったりして危なかった〈110〉」というものであった。

以上から、一足制の場合、校内の汚さが強く印象に残っていることが明らかである。また、雨の日などに濡れた靴を履くことへの不快感、濡れた床を歩く危険性についても指摘されている。

3) 二足制のメリット

では、二足制を採用していた学校生活を経験した回答者は、どのようなメリットを見出しているのだろうか。質問項目21「二足制でよかったことがあれば、記述してください」では、96名から回答があった。これらを、①「校内のきれいさ」、②「雨の日の履き替え」、③「履き替えの楽さ」、④「上靴の動きやすさ」に分けてみよう。

まず、①「校内のきれいさ」に当てはまる回答は90名からあったが、それらは次のようである。「教室が綺麗なこと、掃除が簡単なこと〈83〉」、「土足ではなかったのも、教室に土が入ることがなかった〈132〉」、「靴下になる際に抵抗があまりなかった。上靴に履き替えるほうが、学校が綺麗なままなので良かった。汚れても上靴、という思いがあった〈134〉」。

次に、②「雨の日の履き替え」については5名が記述、それらは「雨で濡れても履き替えられる〈38〉」、「雨で外靴が濡れてもそのまま授業を受けなくて済むこと〈48〉」、「靴を履き替えるので気持ち悪くない〈75〉」というものである。

あるいは、③「履き替えの楽さ」については1名で、「履き替えが一回で済むこと〈92〉」である。そして、④「上靴のデザイン性」に当てはまる回答は2名あり、「上靴の方が動きやすい〈79〉」と「スリッパだったので、圧迫感がなく楽〈40〉」であった。これらのほか、「切り替えができる〈64〉」、「みんな同じような靴で過ごしているから、差がない。〈68〉」という回答もあった。

これらの結果から、二足制のメリットの多くが「校内のきれいさ」であること、これは一足制のデメリット「校内の汚さ」と対となっており、靴制度が学校生活の清潔さに及ぼす影響の大きさは明確である。また、一足制のデメリットである「雨の日の土足」に関して、二足制の場合は「雨の日の履き替え」をメリットと捉える点でも好対照であると同時に、靴制度が学校での心地よさと強く関連していることがわかる。

この他、上履きが定められることに関して「公平性」への言及があった。すなわち、一足制では家庭事情などから靴のデザインや価格などで個人差が出てしまう。しかし、二足制では校内においてこうした違いを生み出さずにすむ。こうした点からも、靴制度のあり方が児童生徒の学校生活に大きな影響を及ぼしていることを認められるだろう。

4) 二足制のデメリット

質問項目 22「二足制で嫌だったことがあれば、記述してください」には、80 名から回答があった。これらを、①「履き替えの手間」、②「上靴の手間」、③「昇降口での混雑」、④「上靴トラブル」、⑤「上靴への不満」、⑥「上靴の汚れ」に分けて見てみよう。

まず、①「履き替えの手間」については 56 名から回答があり、「履き替えるのが面倒くさい〈1、7、15、19、28、54、69、108、114〉」、「脱ぎにくい靴を履いてきた時に面倒臭い〈79〉」、「履き替える手間が多いこと（例えば、外での部活中にトイレに行くために昇降口で履き替えなければならなかった。しかし、多くの人は外靴を脱ぎ、靴下のまま行っていたため靴下が汚れた〈83〉）」といった記述が見られる。

また、②「上靴の手間」については 9 名で、以下のようなものである。「学期始めや終わりに持って帰ったり、持ってくるのが面倒くさかった〈10〉」、「高頻度で買い直す〈13〉」、「上履きを洗ってもらわないといけなかったこと。（面倒だった）〈65〉」

そして、③「昇降口での混雑」については 7 名が指摘しており、次のようである。「靴箱周辺で混雑する〈22〉」、「靴箱で混み、すぐ帰れないこと〈83〉」、「小学校はそれか当たり前だったので何も思いませんでした。中学は 3 年生だけ 2 足制だったのですが、当時学年 400 人もいたので、靴箱の前が混みすぎて嫌でした。〈120〉」。

さらに、④「上靴トラブル」については 8 名から、「上靴を忘れるとスリッパを履くことになり周りからの目が恥ずかしかった。〈70〉」「上靴の紛失があった〈29〉」「靴隠しされている人がいたこと〈48〉」「靴の間違いはよく起きていました〈50〉」といった記憶が挙げられている。

また、⑤「上靴への不満」に関しては 9 名あり、以下のようなものである。「学校指定のスリッパがダサいこと〈40〉」、「上靴は薄いから歩いたり走ったりするのがしんどい〈48〉」、「冬の上靴が寒かったこと、履き替える時が寒かったこと〈51〉」、「上靴のサイズが合わなくなる人もいる〈95〉」。

さいごに、⑥「上靴の汚れ」について 3 名の回答があり、「雨の日に廊下が汚いから、上靴も汚くなるのが嫌だった〈79〉」、「中途半端な二足制で下足のところを上履きで歩くので、上履きが汚れていく一方だったこと〈14〉」といった記憶が記されている。

以上の結果から、二足制のデメリットは履き替えの手間にあったとする回答の多いこと、これは、履き替えの必要がない一足制のメリットと対照的であり、学校生活において靴を履き替えることの手間暇あるいは煩わしさが児童生徒にとって大きな意味を持っていることがわかる。これに関連して、昇降口が混雑することについても書かれており、二足制が一足制と比べて手

間を要することは明らかである。

この他、上靴が必要なことから生じる「忘れ物」や「靴隠し」などトラブルに関する回想も見られた。靴隠しは、いじめなどの深刻な問題につながりかねない点で、靴制度は軽視できない仕掛けとなっている。さらに、上靴では歩きにくいといった機能性に関わる不満、上履きが「ダサイ」というデザイン性に関わる不満にも注目すべきだろう。

なお、校舎外を移動する場合でも上靴だったという、緩やかな二足制を経験したケースでは、上靴の汚れについて述べられている。このことは、二足制が「校内のきれいさ」に必ずしもつながっておらず、形式的な区分に留まっていることを示すものだろう。

5) 靴制度の違いに対する受け止め

さいごは、中学校で一足制となった場合にたずねた質問項目 23「中学校に進学して靴制度の変化について感じたこと」についてである。ここには 46 名から回答が得られたが、以下、「楽」「違和感・驚き」「汚い」に分類される記述に注目する。

まず、「楽」に当てはまるのは 16 名で、「初めは外靴で校舎内に入るのに抵抗があったが、履き替えがない分、楽だと感じた〈12〉」「最初は違和感があった（特に衛生面）が、楽なのですぐに慣れた〈20〉」と躊躇した様子を示しつつも、「上靴を持っていなくて、荷物が楽だった。また上靴を隠されるなどのいじめはなくなる。〈17〉」、「上履きを定期的に持って帰って洗う必要が無くなったのが楽であった〈114〉」、「掃除の際の手間よりもスムーズに移動できるメリットの方が大きかった。〈133〉」と肯定的に思い出している者が 10 名と多い。

また、楽になったとメリットを感じる一方、何らかのデメリットを感じたものも 4 名あった。それらは、「雨とかの日は滑りやすくなっていたから危ないと感じたことは何度かあった。〈31〉」、「楽になったが、廊下が運動場の砂や土だらけになることが増えた〈94〉」というものである。

次に、「違和感・驚き」については 10 名で、「教室に土足のまま入ることへの違和感〈100〉」、「2 足制が当たり前だと思っていたので、衝撃だった。3 年間ずっと 2 足制希望だったが、靴箱を置くところが確保できないということで実現されず、今も 1 足制である〈11〉」という思い出が記されている。これらに加えて、「はじめは、教室に土足で入ることが、家の中に靴で入るみたいな感じで気持ち悪かったが、1 週間もすれば、何も感じなくなっていた。〈69〉」という、違和感を否めなかったものの次第に慣れたという回想も、4 名に見られた。

そして、「汚い」に関する記述は 16 名からあり、代表的と思われるのは次のような回想である。「一足制に変わったとき、校舎内が非常に汚いと感じました。また、普段の生活も外靴で過ごすため、靴が服や机に掛けている荷物にあたるとすぐに汚れるのが嫌でした。〈62〉」。

以上、小学校から中学校の間で靴制度が変わったことに対する記憶は、履き替えの手間がなくなったことを楽と感じたものから、汚くなることに対する嫌悪感と、好悪の幅がある。こうした違和感や驚きが見られることは、小中一貫教育とスムーズな小中接続が学校政策・行政的に謳われることとは別に、児童や生徒なりに受け止めていることを示すものだろう。

5. 結論

以上の結果と考察から、次の知見が得られる。

第一に、京都市立小学校はすべてが二足制な一方、同中学校では 64 校のうちおよそ 3 分の 2 に相当する 41 校で一足制を採用している。先行研究では言及されていない、学校での一足制が多数とも言える自治体が存在するのである。

また、いずれも京都市立の学校でありながら、靴制度は決して一様ではなく、中学校については同じ行政区であっても一足制と二足制が混在している。さらには、小中合同での学校運営協議会が設置されている一方、小学校と中学校で靴制度が異なる場合も明らかになった。なお、回答には「3 足制」との記述も見られ、いわゆる体育館シューズを含めれば、学校生活の実際が多様なことを想定できる。

第二に、京都市立小・中学校の卒業生への調査から、靴制度がかれらの学校生活に利便さや気楽さをもたらすと同時に、それが衛生上の嫌悪感、安全上の懸念、いじめにつながりかねない管理上の課題といった点に影響を及ぼしていることがわかった。靴制度という学校経営の範疇に置かれるこの事項が、児童生徒の実態や受け止めにより整合するのか、また、小中一貫教育や小中合同での学校運営協議会が推進される中、各学校で靴制度がいかに扱われるべきかについて、児童生徒を含めた学校関係者の議論が求められる。

注

- 1) 榊原 (2012)、榊原・西村・森脇 (2013)、榊原・築山・筒井 (2022)、を参照。
- 2) 神崎綾花・砂本文彦 (2019)
- 3) 同上、p.1399
- 4) 同上
- 5) 吉田智美・河村美穂 (2009)
- 6) 同上、p.125
- 7) 同上、p.127
- 8) 佐藤 (1987)、p.23.
- 9) 同上
- 10) 佐藤 (2000)、p.59.
- 11) 久世西小学校 HP 内、学校ニュース 2009 年 9 月 2 日付「校舎内が二足制になりました」
<https://cms.edu.city.kyoto.jp/weblog/index.php?id=106009&date=20100331&optiondate=200909&no=1> (最終閲覧日、2023 年 4 月 20 日)
- 12) 京都市教育委員会「京都市立小・中・小中学校の通学区域」
<https://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/page/0000246308.html> (最終閲覧日、2023 年 4 月 20 日)
- 13) 例えば、「楽、入り口が混まない〈76〉」という回答は、「楽」と「昇降口での混雑」の 2 つの要素で捉えられると見なした。

文献

- 神崎綾花・砂本文彦（2019）「小学校の二足制採用の歴史的経緯と全国の現状について」日本建築学会『日本建築学会技術報告集』第25巻第61号、pp.1398-1402.
- 榊原禎宏（2012）「叱るときこそ丁寧に―教師の子ども呼称における賭け―」『教育実践研究紀要』（京都教育大学教育学部附属教育実践総合センター）12号、pp.225-229.
- 榊原禎宏・西村府子・森脇正博（2013）「教師はなぜ授業中の挙手を好むのか―教師の思惑、子どもとの都合―」『教育実践研究紀要』13号、pp.223-232.
- 榊原禎宏・築山侑紗・筒井啓華（2022）「学級経営としての教員の演出と児童との齟齬―小学校における「みんな遊び」と「席替え」を事例に―」『京都教育大学紀要』141号、pp.93-106..
- 佐藤秀夫（1987）「昇降口」『学校ことはじめ事典』小学館
- 佐藤秀夫（2000）「学校と空間」『教育の歴史』放送大学教育振興会
- 吉田智美・河村美穂（2009）「学校生活における上履きの変遷とその役割」『埼玉大学紀要 教育学部』第58巻第2号、pp.123-134.

追記、本論文は、1を榊原、2、3、4、5を中尾が担当して執筆したのち、全体の調整を榊原が図った。

